

一九世紀後半の日本絹織物業における機械化過程と世界史的背景

——杉田定一の海外視察旅行に関連して——

岩 本 真 一

当地ニテハ日本ヲ学ビ、日本ニテハ当地ヲ学ビ⁽¹⁾

本稿は、杉田定一が繊維産業における機械化を必要と認識するにいたった転換の背景と、杉田の羽二重輸出の具体案について、複数の主題から論じる。

一 問題提起と杉田の海外視察

(1) 「近代日本」の歴史研究における問題

およそ歴史研究は、特定のテーマを選出したうえで、そのテーマが何らかの転換を遂げた点を前提とし、変化そのものの描写や要因分析を行なう傾向が強い。しかし、どの

ような研究にあらうとも、転換そのものはアプリアリにされることが多い。すなわち、転換を突き動かした事態については不問にされる。織物業にあつては力織機械化という転換がこれにあたる。

従来のマルクス史学・経済史学で中心的な議題となつた問屋制から工場制への移行に対し、主に一九九〇年代以降の研究で否定的見解が提起された。一々先行研究を挙げる暇がないが、およそは、「全ての生産体制や生産組織が工場制に移行したわけではない」という点に集約できる。すなわち、例外探し研究である。いうまでもなく、例外は「例」そのものを前提とするのであつて、その意味では、例

外探しから歴史像は構築することはできず、批判対象となるはずのマルクス史学・経済史学、しいてはマルクスの着眼点の深さを逆に立証しかねない。

また、問屋制から工場制への移行に対し、「近代日本」という時期設定を行なったうえで、この移行を過小評価する観点にも深い問題が存在する。およそイギリスで二〇〇年ほどの間に、そのような移行やシフトが生じたとしても、それが日本の場合、「一九世紀後半から二〇世紀前半にかけての時期（ほぼ「近代」と呼ばれる時期）に、日本において実現できなければならぬ」という義務は、当然ながらマルクスが課したわけではない。研究上の習慣・都合を最優先させ、対象時期や地域を限定させることによって、問屋制から工場制への移行やシフトを恣意的に除外させるという転倒も、歴史学や経済史学において頻繁に見られる事態である。さらにいえば、「同一資本の指揮下」(unter dem Kommando desselben Kapitals)²⁾とマルクスが指摘した工場制の本質³⁾からみれば、分散型の生産組織と集中型の生産組織に大差はなく、「同一資本」を何に想定するかによって結論は異なる。

(2) 一九世紀後半の日本における織機的前提

紡績機が二〇〇錐から一万錐、さらには五万錐といった規模へ巨大化した紡績業のような典型的な工場に対し、そこそこの立地面積が確保されれば小規模工場であろうとも力織機設置による操業が可能であった織物業など、中小規模の工場を対置することによって、分散型の生産組織や問屋制の有する伸縮的な効率性を高評価する研究は後を絶たない。とりわけ織物業の場合、日本では紡績業に比して機械化は遅れ、二〇世紀初頭になっても旧態依然の手織機による生産が広く行なわれていた。しかし、織物業研究（に限らず在来産業について触れた研究）は、総じて、旧態依然の手織機が後半に残っている点を「在来」や「伝統」といった用語で一様に捉える傾向があり、旧態依然の手織機そのものの変遷には目を向けない。古い生産財も活用され、問屋制や分散型生産組織がフレキシブルに市場対応を可能にしたといった論点は、えてして、古い生産財そのものの歴史性を看過してしまう。

もつとも、闇雲に数百年間の手織機の変遷を必ず論じる義務があるとは述べないが、手織機の場合、一九世紀中期に日本へ上陸したボタン機には既に飛び杆機能が設置さ

れていたか、あるいは、日本において飛び杼改良（パツタン改良）が活発化したか、いずれかの形によっても、力織機導入以前にはイギリス産業革命による技術成果が日本の手織機へ既に塗りこまれていた点は、研究上、明記せずとも意識しておく必要がある。

(3) 杉田定一による海外視察の概要

さて、杉田定一の海外視察は大きく三期に分かれる。

『杉田定一関係文書目録』⁵⁾の区分によると、①欧米漫遊（一八八六年七月～八八年六月）、②第一回絹織物視察（一八九六年六月～一〇月）、③第二回絹織物視察（一九〇〇年六月～一月）である。三度の渡航のうち、一度目の欧米漫遊は約二年間と長期にわたったが、絹織物視察、とくに羽二重商況視察が主目的となった二度目・三度目の渡航は、それぞれ四ヶ月・半年という短期のものであった。以下では、三度にわたる漫遊と視察をまとめて指す場合は、単に「視察」と略す。

絹部門に限っていえば、①の時点で杉田の関心は、養蚕、染織工場見学に向けられていた。この漫遊は、後の二回の視察に比べ私的な旅行の側面が強いが、養蚕と染織という

二部門への関心があった。次に、②は、福井県絹織物組合組長小川喜三郎と農商務省から任命を受けた渡航であり、フランスをはじめとする欧米市場における日本製絹織物調査、とくに日本の中部地方・北陸地方で生産されていた羽二重の商況を視察する目的をもっていた。総じて、この視察では、羽二重商況問答、織機会社問合せ・織機目録収集という点に関心が寄せられた。この視察成果は、草稿を経て翌九七年に『欧米羽二重商況視察報告』として農商務省から刊行された。最後の③は、一九〇〇年六月から一十月にかけて行なわれ、絹織物工場見学とカタログ収集（編機・ミシンやパリ万博など）の二点に関心が絞られている。

先述したとおり、これら三度の渡航における杉田の関心は、広く絹業全般にわたったものであったが、絹業工程間ごとに分けると、杉田の焦点に変化があったことが分かる。とりわけ、②では、フランスのリヨン商人やイギリス北西部マクルスフィールドの商人たちと羽二重の利用状況を問答し、また、力織機製造会社へ目録請求も行なっており、『欧米羽二重商況視察報告』の内容も含め、残された史料群のなかでは最も具体的な視察内容を窺い知ることができ

表 1 杉田の収集した繊維機械関連のカタログ・パンフレット

(a) 第1回絹織物視察(1896年6月～)

種類	資料タイトル	整理番号
糸巻機 その他	Illustrated Catalogue And Price List Of Shafting, Pulleys, Hangers, & C. (軸材、滑車、吊り材等イラスト入カタログ及価格表)	028-001
	Catalogue No. II. Schaum And Uhlinger(シャウム・ウリンガー社カタログ2号)	028-002
	Horizontal Power Warping Mill.(水平式たて糸巻き機械整経機製造工場のパンフレット)	028-007-002
	Combinirte Zettel - Und Aufbäummaschine Für Seidenketten.(絹織物用複合式たて糸巻き機)	028-011
織機	Benjamin Eastwood, General Machinist. And Manufacturer Of High Grade Silk Machinery.(絹織機製造工場ベンジャミン・イーストウッド社パンフレット)	028-007-001
	[イーストウッド社織機広告]	028-007-003
	[写真](ルーティ機械工場の絹織機)	028-010-001
	Machine Pour L'Ourdissage Et Le Pliage Des Chaines De Soie.(ルーティ機械工場の絹織物機械展示品解説パンフレット)	028-010-002
	Allgemeine Beschreibung Des Neuen Mechan. Seidenwebstuhles, Modell 1892.(1892年型新自動絹織機一般使用説明書)	028-014
	[書簡](杉田によるノウルズ織機工業社製織機に関する問合に付回答書)	028-143-005-001
	Catalogue Of "Sixteen Harness, 4 × 4 Box, Silk Loom"(ノウルズ織機工業社製絹織機カタログ)	028-143-005-002
	Catalogue Of "Ribbon Loom"(ノウルズ織機工業社製リボン織機カタログ)	028-143-005-003
	Eastwood's High - Speed Ribbon Loom.(イーストウッド社高速リボン織機パンフレット)	034-073
	[名刺及書付覚] ([Crompton Loom Works.], [N. B. Church.], [F. T. Knowles.]の名刺, [Paterson Machine Co.]他英文書付、封筒入)	037-006-002
[書付覚](ノウルズ織機工業社他織機製造社名書付)	037-020	

(b) 第2回絹織物視察(1900年6月～)

種類	資料タイトル	整理番号
糸巻機 その他	Anleitung Zum Ajustiren A. Leitonus Am Bobinoir Für Seide.(絹用自動糸巻機の主導円錐部調整手引書)	028-017-001
織機	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 13. Machine Pour L'Ourdissage Et Le Pliage Des Chaines De Soie.(1900年パリ万博、ルーティ機械工場の絹織物機械展示品の解説広告)	028-010-003
	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 3. Métier Pour Soieries.(1900年パリ万博、ルーティ機械工場パンフレット No.3. 絹織機解説)	034-077
	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 1. Métier Pour Soieries.(1900年パリ万博、ルーティ機械工場パンフレット No.1. 絹織機解説、生地見本付)	034-078
	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 2. Métier Pour Soieries.(1900年パリ万博、ルーティ機械工場パンフレット No.2. 絹織機解説、生地見本付)	034-079
	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 4. Métier Pour Soieries.(1900年パリ万博、ルーティ機械工場パンフレット No.4. 絹織機解説、生地見本付)	034-080

織機	Exposition Universelle A Paris. 1900. Description De L'Objet Exposé Sous No. 5. Métier Pour Soieries. (1900年パリ万博、ルーティ機械工場パンフレット No.5. 絹織機解説、生地見本付)	034-081
編機	Price=List For Shuttle Embroidery Machines, Model 1900. (アドルフ・ソーラー社製レース編機、1900年モデル価格表)	034-072-001
	Power Lace Embroidery Machine (624 Needles) (アドルフ・ソーラー社レース編機カタログ)	034-072-002
ミシン	Nouveau Tarif Illustre Singer Machinic A Coudre (シンガー工業社新価格、商標登録パンフレット)	028-008-001
	[絵付シンガー工業社広告]	028-008-002
	The Singer Manufacturing Co. (米国シンガー工業社広告)	028-008-003
	Machines A Coudre, Singer (シンガー足踏みミシン広告)	034-074
パリ万博	Paris Exhibition 1900., Spinners & Manufacturers Of Alpaca, Mohair & Worsted., Silk Seals And Plushes, Black Dike Mills, Queensbury, Bradford. (1900年パリ万博ジョン・フォスター & サン社パンフレット)	028-003-001
	A L'Exposition Universelle De 1900 Catalogue De La Section Russe Fils, Tissus, Vetements (1900年パリ万博、繊維、織物、衣服ロシア部門のカタログ)	028-004
	Décortiqueuse Pour Plantes Textiles En Vert Ou En Sec La Française (ラ・フランセーズの織物用植物剥皮機パンフレット)	028-017-002
	Doulton & Co. Limited. A Description Of Their Exhibits At Paris Exhibition, 1900. (1900年パリ万博、ドールトン社の展示パンフレット)	034-013
	Exposition Universelle Paris 1900., Claes & Flentje (1900年パリ万博、クレース=フレントウイエ社パンフレット)	034-075

(c) 帰国後(主に1910年代)

種類	資料タイトル	整理番号
糸巻機 その他	Spécialité De Machines Pour Le Peignage, La Filature & La Teinturerie (特殊機械コーミング、紡績、染色の広告)	028-009
	Zlatnik & Tlapák Mechanická Továrna Na Bavlněnou Přizi Ku Pletení A Háčkování (ズラトウニーク=トゥラパーク編物刺繍用錦糸製造工場広告)	028-012
	[名刺] Chas. A. Stevens & Bros. Dress Silks Silk Goods. (チャールズ・A・ステューブンス・ブラザーズ社取扱絹ドレス、絹製品)	028-018
	Zlatnik & Tlapák Mechanická Továrna Na Bavlněnou Přizi Ku Pletení A Háčkování (ズラトウニーク=トゥラパーク編物刺繍用錦糸製造工場広告)	034-091
織機	Manufactures De Tissus De Soie (絹織物製造及創設者紹介のパンフレット)	028-005
見本	[生地見本] (織物工場視察にて生地見積りに付)	028-084
	[生地見本]	037-009

(d) 年月不明

種類	資料タイトル	整理番号
見本	[レース刺繍見本]	034-076
	[封筒] (生地見本付)	037-007

出典：「杉田定一関係文書」より筆者作成。

注：「整理番号」は大阪経済大学図書館データベース「杉田定一関係文書」の番号に対応した表記である。「杉田定一関係文書目録」の表記法では、3桁ずつに統一された上記「整理番号」と形式が若干異なる。例えば、データベースによる整理番号「028-001」は、目録では「28-1」となっている。この点、ご留意願いたい。

三度にわたる視察では、すべて絹織物市場調査が行われている。その意味で、杉田にとつての欧米とは、主にフランス、とくに絹織物のメッカ「里昂」(リヨン)であったといつて過言ではない。不慣れな英語を使うことによつて行き先での交流を活発にさせ、工場見学のように細かなやり取りが必要な場合は三井物産をはじめとする商社や個人の人脈を積極的に活用しつつ、産業的才覚が必要とされる局面を前にして対象に即した思考(オブジェクト思考)を發揮しえた点は、政治力にとどまらない彼の分析力を説明するに十分な成果があつたといえる。

さて、三度の視察のうち、織機カタログや広告類を持ち帰つたのは、②の第一回絹織物視察と③の第二回絹織物視察である。これらに加え、帰国後一九一〇年代頃に取り寄せた生地見本やカタログなども含め、一覧化したものが表1である。

表1をみると、(a)第一回絹織物視察では糸巻機と織機、(b)第二回絹織物視察では、それらに加え、編機、ミシン、パリ万博のカタログや広告が集められている。パリ博カタログのうち「Exposition Universelle Paris 1900. Claes & Flanije」は、「一社」の「編機・ミシン、自転車を扱うクレ-

スリフレントウイェ社のパンフレットである。表1の収集物も含め、三度の視察の間に、繊維関連機械全般へ杉田の関心が広がつたことが窺える。

二 欧米漫遊期の関連事情

以下では、清国へ渡る以前から既に、杉田の着想方法において欧米中心的な二分法的理解が形成されていた点を確認し、次に、リヨン絹織物市場において杉田が意識していたマクルスフィールドの絹織物業と、福井県の輸出向け羽二重産業の展開を概観したうえで、杉田の欧米漫遊の概要を記す。

(1) 杉田にみる中国観・欧米観の差異

杉田は、三度にわたる欧米視察を行なう前、八四年八月三〇日に東京を發ち清国へ赴いている。杉田の現状認識は、アロー戦争(第二次アヘン戦争)と清仏戦争で清国が敗戦した経緯のもとで大きく変わった。端的にいえば、若かりし杉田は清国に対し文明国であると認識していたが、清仏戦争前後の間に、天津や北京を汚い街と認識し、パリやロンドンを文明の街と断定するようになる。双方の結節点とな

る地域は上海であった。

まず、清国へ赴く前、八三年ないしは翌年八月までに記されたと考えられる「東洋自由振起論」⁷⁾からは、杉田が、ユーラシア大陸のうちヨーロッパを除く地域、すなわち、トルコや中央アジア以东・以南をおよそ「東洋」と認識し、イギリス・ロシア・フランス等の軍事的膨張に対し、東洋全体に自衛の必要性があると説いている。「東洋ノ大勢既ニ去ル」という状況のもとで「一孤島ノ治安」を維持する困難さを力説している。とりわけ、杉田にとってはロシア南下に対する危機感は大い。

この「東洋自由振起論」で、杉田は「白色人種」と「黄色人種」、「欧羅巴」と「亜細亜」という二分法理解を土台に自由論を提起している。彼の二分法的発想は、清国旅行記『遊清雜唸』⁸⁾にある「清街積糞集蒼蠅欧界夜輝電氣燈咫尺妍媸天地別中華二字是虚称」の文面が、おそらく最も分かりやすいものであろう。上海の「清街」（中国人街）は「糞」と「蒼蠅」が鬱積し、それに比べ、同じ上海でも「欧界」（租界・外滩・バンド）においては「電氣燈」⁹⁾によって夜も輝いているという認識である。中国人街と租界地には「天地」の差があるという比喩を用いているのも偶然では

ない。「中華」の二文字が形骸化されているとの認識からは、杉田の中で、「中華」ではなく「天地」という物事の判断が成立していることを物語る。「中華」が杉田にとっての世界観ではなくなった点は、「清人呼日本人ノ言東洋人」との下りからも理解できよう。¹⁰⁾

なお、このような視線の変化が、杉田の中でどのように起こってきたのかについて現段階で詳細に確認することはできていない。杉田にみられる視点の変化には、既に一九世紀中期の中国側・日本側の知識人や政治家たちにもみられた世界認識の転換が少なからずとも影響を与えていると考えられる。この点については、いくつかの見通しの良い研究が存在する。まず、銭国紅『日本と中国における「西洋」の発見』¹¹⁾では、高杉晋作、五代友厚、中牟田倉之助らの場合、上海という場所が開国か攘夷かの二者択一について検討する機会を与えた点を指摘している。劉建輝の研究によると、とりわけ高杉の場合、上海において、「西洋人と中国人のあいだに存在する「使役」と「被使役」の関係」が、彼の動揺を誘ったという。¹²⁾また、閻立「清朝同治年間における幕末期日本の位置づけ」¹³⁾からは、日本側の対清交易・貿易政策の変化と清国側の具体的対応が理解しやすい。こ

これらの研究を踏まえるならば、およそ、杉田の場合、西洋か清国かという二分法的選択肢に迫られた高杉らの上海体験とは異なり、清国ではなく西洋（ないしは欧米）という二分法的結論が既に前提となっていた。

他方、フランス、とりわけパリもまた、北京よりも早い一八世紀に、汚物都市であったことは広く知られている。⁽¹⁴⁾

一九世紀後半（一八七〇年代）になると、パリは、ナポレオン三世とオスマン市長によって都市改造が行なわれ、⁽¹⁵⁾その後には公衆衛生の観念や清潔感が形成されるようになり、汚物都市からの離脱が始まった。

問題は、杉田が実際に渡清する前に得た知識・情報が書物によるものであったことにある。⁽¹⁶⁾書物で杉田が知り得た清国事情のうち、新興の国際都市上海については多くの情報や知識が記されていなかったと考えられる。杉田は、八四年に記した『遊清餘感』のなかで次のように述べている。「上海ノ地タル各国居留地ニシテ半欧半清支那ノ大勢ヲ知ルニ足ラズ、大勢ヲ知ル帝都ノ在ル所為政ノ出ル所ニ赴クニ如カザルヲ覚知シ北京ニ遊ブ。其ノ制度風俗人情ノ在ル所ヲ見聞スルニ全ク平生書籍ヲ讀ミ詩文ニ看ル所ト霄壤の差アリ……中略……腐敗紊亂紀綱振ハズ、賄賂公行進士及

第ノ設アルモ其学ブ所ノ書四書六経ノミニシテ、欧羅巴ノ書ニ涉ラズ故ニ字内事情ニ疎⁽¹⁷⁾い。同時代日本の事例に当て嵌めれば、神戸や横浜では日本の大勢が理解できない故に東京へ赴くということになる。

まず、杉田の読んだ清国関係の書物には「各国居留地」の展開する上海は記載されていなかったであろう。「半欧半清」の上海では「清支那ノ大勢」を知ることができないから北京へ行くという論理は、杉田の読書体験によって蓄積された清国の印象（渡清前の若かりし杉田にとっての文明国）を追認する目的以上のものではない。上海は、読書体験で得た知識や印象に相応しくない場所であると杉田は考え、「支那ノ大勢ヲ知ル」ために北京へ渡った。⁽¹⁸⁾すなわち、著述された北京ないしは清国は、杉田にとって過去の文明国として認識されていたといえよう。北京では、「腐敗紊亂紀綱振ハズ」との指摘を行ないながらも、他方で風景を見ながら詩を書いていることや、後にパリへ赴いた際に、リヨンでラベル偽装問題が頻繁に行なわれている点を実見しながらも、それを腐敗として認識しなかった落差を踏まえるならば、経済や政治の目標として「欧米」をアプリアリに設定した態度が窺える。実際に清国へ旅する以前に、

杉田のなかで大きな先入観が形成されていたとみるべきであろう。このような先入観は、「舟入天津近北京馬尿豚糞路」⁽¹⁹⁾とあるように、もはや、馬の尿と豚の糞が確証もなく記されるようになっていことから決定的である。すなわち、中国の光景、とりわけ街路については、実見したものではなく慣用句として記述されている。換言すれば、文明（清潔）に対し、野蛮（不潔）という図式的認識が既に杉田の中に刷り込まれていた。杉田の清国旅行は、「欧米」への視線・憧憬を自認するための一瞥・決別の旅であったと要約できよう。

杉田の視線を通じて理解できるように、中国の過去・自然に対しては表敬、現状に対しては蔑視という視線が、遅くとも一九世紀末の日本で成立していたわけであるが、不潔、厚顔、滑稽という三種の認識は二〇世紀に入っても日本が中国に対し向けていた視線であった⁽²⁰⁾。ヨーロッパで始まった自給自足的生活の解体と、それに付随した自然からの人工の分離という事態は、近代化、工業化、資本主義化に着手した日本にとって、中国（過去・自然）と欧米（現在・人工）という二分法として機能し得たと換言できよう。⁽²¹⁾

(2) マクスフィールドの絹織物業と一九世紀の状況⁽²²⁾

次に、イギリスのチェスター州マクスフィールドに視点を移そう。当地は絹貿易と絹産業が長期にわたって展開した地域である。地の利を活かし、一七世紀にはフランスやランドルと同時期に蚕がもたらされ、養蚕業をもとに絹ボタン産業が勃興した。その後、一七四〇年代にイタリヤから水力紡績機が導入され、絹紡績業が勃興した。マクスフィールドの絹糸は、当時高品質の絹織物業地とされていたロンドン東端スピタルフィールドの織工たちに提供されたという。T・S・アシュトンが「スピタルフィールド、コヴェントリー、ノリッジ、マクスフィールドのよな都市へ集中する傾向」⁽²³⁾が一八世紀前半の「絹織物工」⁽²⁴⁾にみられたと指摘しているのには、前述の経緯があつた。

海外での認知を得た一八世紀中期から世紀末にかけて、マクスフィールドでは手織機による絹織物業が展開し、現地労働者を大量に雇用した代表的産業へと発展した。地域的な特色として、広幅織物のギンガムやダマスクが有名であったという。染色部門でも無地染・柄染が展開した。一九世紀初頭、一八一〇年代に九〇〇〇人近かった人口は、二〇年間で二万三〇〇〇人まで増加した。このようなマク

ルスフィイルドの絹織物産業の勃興（絹紡績業から絹織物業への転換）には、スピタルフィイルズ絹織物業の衰退が大きな要因となっていた。⁽²⁵⁾

力織機がマクルスフィイルドに紹介されたのは一八二〇年代のことであり、絹織物よりも綿織物部門へ先に導入されたという。力織機を絹製織に適応させる初歩的問題があったからである。また、ジャカード製織のメカニズムは、遅くとも一八三〇年代に知られるようになった。フランスのジャカード機製造会社「Dervogé」がマンチェスターに進出し、直後にマクルスフィイルドの織物工場数社と提携を結んだ。一八三八年頃は少数に留まっていたものの、力織機の導入は手織工たちに対し優位を占めるようになった。四〇年代以降、力織機は膨大な産出量をものともせず、絹織物の量産が実現した。

とはいえ、マクルスフィイルドの絹織物産業は、既に養蚕業・絹紡績業との連動性が崩れており、輸入未加工原料と不安定市場に大きく依存していたため、雇用者たちの多くが労賃を削減した。それでも、織工たちは現地貴族たちのステータスを支える製品を産出し続けた。しかし、既に一九世紀初頭には手織工たちの労賃が頭打ちを経験してい

た。いうまでもなく、地域の代表産業における労賃が低下傾向に入るということは、当該地域の大半の家計を直撃する事態を意味した。このような事態を前に、アイルランド移民や農村部出身の没落木綿商には抵抗する術がなかった。織工たちは木賃宿や小店舗へ離散しはじめた。もし彼らが抵抗すれば、織物工場主たちは、田舎の家計補助的な低賃金労働力を利用して織物生産を委託したのであろうし、マクルスフィイルドの労働者たちの最低賃金よりも低い賃金でそれを行なったであろう。

一八四〇年代まで、マクルスフィイルドの織工たちは、手織工と機械織工とを問わず、市場変動や原料輸移入という不安定要因を理由に、雇主に低賃金で働かされたという状況にあった。しかし、産業としてみた場合、マクルスフィイルドは一九世紀前半を通じて成長を遂げ、完成品輸出をはじめ、製織・染色といった各工程の中心地域としても卓越した国際的地位を占めた。一九世紀中期に行なわれた複数の万国博覧会で、男性向けに、バンドナ、ハンカチーフ、ベストイン、サーセネット、女性向けに、ベルベット（ピロード）、サテン、シヨール、トリミングが出品・出展されたという。

しかし、マクルスフィイルドの衰退を決定づけたのは、この一九世紀中期のことであった。アシュトンが指摘した一八世紀以後、一九世紀の前半にかけて当地への移住は大規模に行なわれたが、一八六〇年代になると、植民地カナダや米国への移住奨励策が導入され、自由かつ補助金のつく移転が本格的に開始された。マクルスフィイルドの多数の家族が向かったのは、アメリカ合衆国ニュージャージー州パターンソンであった。パターンソンは、以後、アメリカ絹業の中心地となる。しかし、マクルスフィイルド出身のジョン・ライルがアメリカ産業の保護貿易運動の先頭に立ったことを発端に、アメリカとの関係が絶たれたマクルスフィイルドの栄華は衰退へと向かい始め⁽²⁶⁾、「地場産業としてのスカーフ織工業の担い手の地位に甘んじ⁽²⁷⁾」る段階に入った。

(3) 欧米漫遊へ

「欧米漫遊」は、一八八六年七月から一八八八年六月にかけて行なわれた。概要的な旅行記としては「欧米漫遊雜吟⁽²⁸⁾」が残されている。この漫遊は、後の二回の視察に比べ、プライベート旅行の意味合いが強い。この漫遊では、三井

物産を介した形で織物工場などの視察を打診している点が絹織物関係で特徴的な仕事であった。

「第七回倫敦通信」(一八八七年四月二日)⁽²⁹⁾で米国婦人の主流職業の人数把握を行ない、織維・裁縫業の産業化の規模を知る一方で、「倫敦通信原稿」(一八八七年六月四日)⁽³⁰⁾からは、日本における「西洋服大流行」と、在外日本人の一部にみる「日本服」の奇抜さ双方に躊躇を覚えるなど、当時ドラステイックに変化し始めた日本の服飾文化を垣間見させる⁽³¹⁾。

さて、残された手記からは、養蚕と染織という二部門への関心が伝わってくる。まず、この段階での杉田は、ロンドンからの妻鈴宛書簡(八七年六月四日付)で、「経済独立ガ肝要ナリ」との問題意識にもとづき、「日本カ外国ニ向テ第一等ノ物産ハ養蚕生絲ナリ。我郷里越前ニ於テモ⁽³²⁾」と述べており、養蚕業・製糸業の重要性を指摘している。

染織への関心としては、キャリコ捺染機製造所や織物工場の見学を三井物産経由で依頼している点も見逃せない。八八年三月八日に三井物産ロンドン支社は、前者、すなわち、マンチェスターにあるメイザー&プラット社(Mather & Platt)⁽³³⁾のサルフォード鉄工所(Salford Iron Works)と、後

者、すなわち、ヨークシャー地方リーズにあるパーカー&ムーデイ社 (Barker & Moody) のパーシヴィアランス工場 (Perseverance Mills)⁽³⁴⁾ の二工場に対し、工場見学の希望者杉田を優遇する依頼文を記している。

イギリス綿業については、八八年四月五日にパリで記され父仙十郎へ宛てられた書簡⁽³⁵⁾によると、「今譬へバーノ製造所僅か独り若クハ二人ノ所有ノ社ニテモ、三千四千或ハ五六千人ノ職人ヲ使ヒ、綿ノ織物ノ如キ、綿ヨリ直ニ絲、々ヨリ直ニ染練トナリ、染練ヨリ直ニ織物トナリ、織物ヨリ直ニ荷造リト」なる工場内における一貫生産から出荷にいたる体制に驚きを示した。

(4) 一九世紀末における輸出向羽二重の経緯

『福井石川両県下機業調査報告』⁽³⁶⁾をもとに、輸出向羽二重生産が福井で勃興した概要をまとめると、およそ以下のようになる。「此年(八六年―岩本注)ノ暮ニ当テ偶々東京某商店ヨリ福井市小林清作氏ノ支店ニ向ケ、米國ニ輸出スル絹織物ノ見本ヲ送付シテ其製織ヲ注文シ来レリ、小林氏ハ依テ直ニ之ヲ織工会社ニ依頼セリ、是レ実ニ今ノ輸出平羽⁽³⁷⁾二重ナリシ」。奉書細から、無地の「傘地・ハンケチ地」へ、

さらには輸出向羽二重へという比重推移が一九世紀後半の福井で生じていたことが分かる。輸出向羽二重生産は、「傘地・ハンケチ地」生産の放棄から始まった。「福井ニ於テハ重二傘地・ハンケチ地ノ製織ノミ行ハレ居リシコト、テ、何人モ此羽二重ノ織方ヲ心得タルモノナカリキ」⁽³⁸⁾という状況のもとで、八七年以後、福井県庁以下の奨励政策が進行し、桐生から羽二重技術者を招聘し、羽二重製織が伝授されることとなった。それとともに精錬業や羽二重整理法なども発生し、羽二重生産の軌道は八〇年代末に整備されていった。

輸出向羽二重生産が主流となった福井では、「福井市ヲ中心トシテ大野・鯖江・武生・丸岡等ニ続々、機業家起リ、廿二年三月二ハ全県下ヲ通シテ機数二千台ニ達セリ、此ノ時ニ当テ傘地及ハンケチ地ノ類ハ殆ト跡ヲ絶チ一二羽二重ノミ」⁽³⁹⁾となった。この時点で、既に輸出向羽二重は、「品質良好ニシテ価格ノ廉ナル所ヨリ、海外ニ於ケル評判宜シク注文引キモ切ラザルノ勢」⁽⁴⁰⁾であったという。九二(明治二五)年になると織機台数は一万二〇〇〇台という急増を示した。『福井石川両県下機業調査報告』の「第二章 沿革」は「明治廿五年ハ実ニ福井県ノ絹織業ニ一大革命ヲ生ジタ

ル⁽⁴¹⁾と結んでいる。

このような輸向羽二重生産の勃興と流行の時期は、杉田が欧米漫遊視察の時期と帰国後の時期に重なる。その後二度にわたる海外視察で杉田が羽二重生産における工業化を念頭に、一つは機械化という工業面での提案を行ない、二つに直輸出という商業面での提案を行なったが、その具体的な意義を問いただすならば、工業面では、既に福井で利用されていた「ジャカード・ボタン」に代替する機械の必要性にあり、商業面では横浜の日系商人による価格操作と暴利に対する対策にあった。

もともと、横浜商人が羽二重輸出の動向を左右するという問題は、既に九二年の段階で、福井市内においては打開的な局面がみえていた。すなわち、「廿五年五月ロゼンソール・メーソンノ二商会福井市ニ支店ヲ出シ直接機業家ニ注文ヲナシタルヲ以テ、機業家ニ取りテハ従前ヨリモ非常ナル便益ヲ得ル⁽⁴²⁾」という段階にあった。杉田の商業対策案は、このような福井市内での打開策の、さらなる事後対策として理解できる。すなわち、横浜居住の商人でもなく、外国商会の現地（福井）支店でもなく、組合設立による直輸出政策という点に絞ることができよう。

三 第一回絹織物視察―羽二重輸出対策案―

(1) 焦点と旅程

杉田は、一八九六年六月二日付けで、福井県絹織物組合組長小川喜三郎から「羽二重商況視察ノ為欧米派出員ヲ囑托ス⁽⁴³⁾」との任命を受けた。同趣旨の任命を農商務省からも受け、杉田は二度目にあたる欧米旅行へ発った。今回の視察は機業家の村野文次郎との同行で、一〇月までの四ヶ月にわたるものであった。フランスをはじめとする欧米絹織物市場を視察すること、福井県の代表的産品である羽二重商況を調査することの二点が目的とされた。

この視察は絹織物業のメッカ「里昂」と「里昂製」の実態が捉えられた点で貴重なものであったと考えられる。具体的には、下書き⁽⁴⁴⁾を入念に用意し、フランス・リヨン商人やイングランド西北部マクルスフィールド商人たちに、羽二重の売れ行きや利用状況についてインタビューを行なった。同年一二月の帰国後、翌九七年二月までに『欧米羽二重商況視察報告⁽⁴⁵⁾』を丁寧⁽⁴⁶⁾に執筆した。三月一日には農商務省商工局から同名の報告書も刊行された。

以下では、杉田が提起した絹織物業部門における機械化

と輸出対策案とを紹介する。当時フランスのリヨンは絹織物の販売基地としてだけでなく、織物デザインにおいても、世界的水準に達していた、換言すれば、デザインの流行市場としてリヨンは世界の絹織物市況を支配できたというのが杉田の基本認識である。

杉田の具体的な羽二重輸出対策案では、たとえば、織物デザインの世界的な流行発信地がリヨンである以上、捺染工程を含めた精製品ではなく、当工程を経ずに半製品として輸出する点や、日本製羽二重の品質を考慮し、生羽二重よりも高品質な練羽二重の方が販路は大きいといった点である。また、後述するとおり、他国産織物であろうとも里昂製織物として販売（再輸出）されている実態も指摘されている。さらに、この視察で杉田は、福井県をはじめとする日本の絹織物業界に力織機（機械製織機）を導入する必要性を感じはじめており、ノウルズ織機会社などへ織機価格一覧を請求している点も見逃せない。この関心は次回の絹織物視察へと継続された。

簡単に旅程を紹介すると、渡米、渡欧の順である。六月二六日に横浜を出帆した杉田は、七月一二日にサンフランシスコへ到着した。米国・カナダでは、シカゴ、トロント、

ニューヨーク、パターソンなどを歴訪した後、八月二二日にニューヨークを出帆し、一九日にイングランド北西部のリバプールへ到着した。ロンドン、マンチェスター、マクスフィールド、リーズ、ヨーブレーなどが主な訪問地であった。これらは「諸製造地巡回」⁽⁴⁷⁾とあり、とりわけ工業視察要素が強い。九月一九日にロンドンを発ち、同日内にパリへ到着し、リヨンへ向かった。リヨンでもまた「同地諸製造所を歴覧」⁽⁴⁸⁾し、一〇月一〇日以降に、ジュネーブ、ルツェルン、チューリッヒ、リウターなどを巡回し、再びリヨンへ戻る。一〇月二五日にマルセイユを出帆し、インド洋経由で一二月三日に横浜港へ到着した。世界の絹織物業中心地と杉田が認識していたリヨンをはじめ、絹織物業の衰退によって大量の移民が発生したマクルスフィールドと、その織工たちが向かったパターソンを杉田が一度の視察で訪問していることは、絹織物業主産地の盛衰を準備している側面も有した旅程として興味深い。

(2) 「欧米羽二重商況視察報告」の検討

今回の視察報告は、三点の報告書としてまとめられた。まずは、視察報告の草稿⁽⁴⁹⁾であり、これは帰国翌年の一八九

七年二月に記された。この草稿を元に印刷されたのが二種類存在し、一つは、同月に印刷された『杉田定一君村野文次郎君絹織物海外視察報告書』⁽⁵⁰⁾で、杉田の担当分は「欧米羽二重商況視察報告」として二月四日付け、村野文次郎の担当分は「絹織物海外視察報告」⁽⁵¹⁾で一月二〇日付けとなっており、両者をまとめた形で印刷され、福井県絹織物組合組長小川喜三郎宛に提出された。二つ目の印刷物は、『欧米羽二重商況視察報告』⁽⁵²⁾（杉田定一著、農商務省商工局発行）で、一八九七年三月に刊行された。

以下では、草稿を中心に、杉田の羽二重輸出対策案を詳細に検討する。草稿は、先述した旅程から始まり、「取調要項」一〇点、「考案」三点が続き、結論で締めくくられている。「取調要項」から順を追って確認しよう。

まず、一点目の羽二重の使用法では、「婦人ノ衣服」「襦袢」「襟巻」「装飾品」「男子ノ襟飾」が挙げられている。二点目の「嗜好流行」では、毎年・毎月変化するため予想を立てにくい点が指摘されている。そして、「新奇ノ流行ヲ案出シ人ノ嗜好ニ投ズルハ佛国里昂ニシテ、実ニ里昂ハ世界流行ノ根本地ト云フモ敢テ過言ニ非ズ」とあるように、フランスのリヨンが流行発信元との認識がなされている。

羽二重の多くは、リヨンの「製造人」によって加工を経て、「新型新流行品」となって他方面へ再輸出され、人気を博していた。

第一章(3)でも触れたが、リヨンからの再輸出については「或国」と変更されたため窺い知れないだけに、以下の指摘は興味深い。「一例ヲ挙ニ米国等ニテハ里昂ノ加工ヲ経ザルモ経タル者ト唱ヘ日本品ナルモ佛国産ノ印ヲツケテ売却スルヲ実見シタリ」。すなわち、リヨン「製造人」の加工が施されているか否かを問わずフランス産というラベ

表2 「取調要項」一〇点

第一	羽二重ハ何ニ使用スルヤ
第二	嗜好流行ハ如何
第三	生羽二重ト練羽二重ト輸出得失如何
第四	改良ノ点如何
第五	競争品ハナキヤ
第六	将来需用如何
第七	直輸出如何
第八	機械購求ノ必要ナキヤ
第九	羽二重ノ外絹織物ニシテ流行ヲ逐ハザル者アリヤ
第十	手巾ノ需用如何

出典：「欧米羽二重商況視察報告(草稿)」〔文書二七―三三―

一〕より作成。

ルが貼られ、アメリカ合衆国へ再輸出されているということである。絹織物業の総本山とでもいえるべきリヨンの一面を見るのができよう。

リヨンが織物デザイナーの流行発信地であると同時に、輸入された絹織物の一部がフランス産と偽装される事態を踏まえ、杉田は、「将来日本ニ於テ里昂ヲ凌駕スルノ新機軸ヲ案出シ世界ノ信用ヲ博スルニ至ルニ非ルヨリハ、万里ノ異域ニ在リ四時変化する所ノ彼ノ流行ヲ逐ヒ嗜好ニ投ズル事頗ル至難ナリ」と認識したうえで、「故ニ当今ノ処ハ、無地ノ白羽二重ヲ出スヲ以テ得策」だと導く。「無地ノ白羽二重」によってどのような流行にも対処できるという対仏羽二重輸出の具体的な品目戦略である。⁽⁵³⁾

三点目として杉田が焦点を当てるのは、精錬加工が施された無地の羽二重かどうかである。換言すると、蚕から吐き出される生糸の唾液成分を煮沸などによって飛ばすかどうか、すなわち、生羽二重と練羽二重のいずれが輸出向けとして有効かという問いである。唾液成分を残せば生羽二重と呼ばれ、硬質の生地が出来る。逆に、成分を減少させれば練羽二重といい、軟質のさらさらした生地となる。先のリヨンで触れていた流行支配の側面から、「精製品」と

して輸出するのは難しく「半製品」が無難であり、その場合、生羽二重は「益々其品位価格ヲ落ス」危険性があるため、練羽二重が妥当であるとの判断を下している。このような経緯から、杉田の案出した対仏羽二重輸出対策は、白練羽二重に収斂していった。

次に、生羽二重の輸出は練羽二重に比して「益々其品位価格ヲ落ス」と触れている点について検討しよう。四点目の「改良ノ点如何」という問いである。杉田の見識では、羽二重は「欧米到ル處、羽二重ハ耳ガ悪シク且筋アリ、光沢ナク平均ナラズ不揃ナリ、トノ攻撃ハ万口一様ニ出ヅ」という事態にあった。現状のように廉価のみを強調し、製品の不統一を打開する努力を怠っては、羽二重輸出の将来に陰りがさすという注意を促している。特に、製品の不統一については、「不揃」と「見本ト品物ト相違スル」という二点から指摘がなされている。また、「契約期限ヲ違ヘル」点も打開すべきと指示されている。

このような対策案と本格的な輸出化に向けた留意点を踏まえ、杉田は、リヨン市場における羽二重の競合品は何かと視野を広げる。すなわち、五点目の「競争品ハナキヤ」である。検討対象に挙げられているのはスイスと中国であ

る。

まず、当時、羽二重にとって脅威だと認識されることの多かったスイス産絹織物は、「軽目ニシテ値段安く且割合ニ品柄善キ物ヲ織出シ」たものであった。しかし、杉田は、スイス産の絹織物については羽二重の敵とはならない点を強調し、その理由に原料少と賃銀高の二点に求め、逆に「原料豊富賃金低廉」である日本産絹織物の優位性をみる。そして、一部のスイスの染織業者には、無地の羽二重に加工を施すことによって利益を得るケースが見られると報告している。

次に、中国産絹については、「唯ダ茲ニ注意ヲ要スルハ支那絹所謂ボンヂエナリ」と認識し、「羽二重ニ比シテ丈夫且コワミアリ」点に「ボンヂエ」の強みがあり、羽二重以上の輸出高を示すと指摘している。そして、「敵ハ万里ノ天涯ニ非ズシテ却テ一衣帯水ノ外ニ在リ油断スベカラズ」というように、フランスを中心とした絹織物市場において、日本と中国との競争関係が存在するとの理解を示している。

以下、羽二重の今後を展望した六日目から一〇日目までの内容を確認する。まず、六点目の「将来需用如何」との

問いに対しては、絹織物が高価なゆえ、「上流社会ニ非ザレバ着用スル能ハザリシニ今羽二重ノ如キ廉価ニシテ購求シ得ル者出来タルヲ以テ中流ノ者モ段々着用スルニ至リタル」という事態を踏まえ、先述した四点目の「改良ノ点如何」にみられた杉田の提案が改良されれば、将来の需要は増加傾向に入るだろうと予測されている。七点目の「直輸出如何」では「大ニ見込アル」とし、「中買ノ手数ヲ省」くことによって、「口銭減」ず必要を説く。廉価を維持して「直取引」に引き込むという提案である。その際、特に注意を促しているのは、やはり先の四点目にみられた改良点の一つ、「見本ト品物ト相違スル」点と契約期限の履行である。また、直輸出に伴なう困難として、「入金ノ遅キ事」を挙げ、「金融ヲ付ケ置ク」重要性を指摘する。直輸出、「見本ト品物」の統一、金額面での問題といった点は、「取調要項」に続く「考案」で打開策が論じられる。

さて、八点目の「機械購求ノ必要ナキヤ」では、「欧米諸国」では高賃金ゆえに機械導入が必須であるのに対し、日本の場合、「衣食安ク労働高カラザル」ため手織が妥当であるという基本見解である。その上で、現状認識として、杉田はイギリスのような「到ル處烟突縦横会社林立凡テ機

械仕懸ノ国」においても、「マクスレスフヒールド」のように「機械織」と「手織」が半々の地域もあれば、フランスのヨンのように、「大会社組織ニ非ズ戸毎ニ製造スルモノニシテ多クハ手織ニシテ機械織リハ実ニ僅々タル」地域もあるとしている。マクススフイールドやリヨンの織機状況を日本の現状と照らし合わせ、「機械織リヨリ手織ヲ適当」としつつも、今後、日本国内の賃金が上昇した場合に機械が導入される点を指摘し、「学校等ニ於テ、試験ノ為新奇ノ機械ヲ買求メ置キ、生徒ニ教授シ、他日必用ノ時機ニ後レザル様注意」を促している。「機械織」と「手織」いずれにも技術的対応が速やかに行なわれる準備を促した、丁寧な忠言であるといえよう。

九点目と一〇点目では、羽二重の利用品目について検討する。まず、九点目の問いには、羽二重をはじめとする絹織物で、流行を追う必要のない使われ方として、「洋服ノ裏地」が挙げられている。また、一〇点目の「手巾」(ハンカチーフ)は、一般的に麻織物の方が適合的で、絹織物では限界があると記している。

「取調要項」は以上である。次に、四点目の羽二重改良案を中心に練られた「考案」の三点を検討しよう。主題は、

「輸出組合ヲ設ル事」「金融ノ便利ヲ付クル事」「検査所ヲ設ル事」である。

まず、羽二重の直輸出を目的にする以上、輸出組合を設置することによって、「品物ノ不揃ヲ一定シ見本ト売品トヲ違ヘズ、契約期限ヲ履行シ、信用ヲ守ル等」を実現させる必要性を説いている。そして、輸出側が契約を履行し、取引相手となる商人側に不払いなどの問題が生ずる危惧については、「我先ツ自ラ欺ヒテ彼後チニ侮ルナリ」との態度を示すよう杉田は断言しており、「東洋居留商」には若干不信を抱く点を漏らしているものの、「彼内地ニ於ル外商」や「彼本国商人」などへは、杉田側から信頼を置いている点が窺える。

次に、金融面での対策では、フランスには「為荷替等ノ法アルモ、多クハ売却後ノ勘定ニシテ入金ノ遅キ事」に焦点をあて、「往復売捌時間凡ソ六ヶ月以上八ヶ月(丈夫ニ見積テ一年)以内位ヲ見込」んだ資金融通の必要性を説く。その基盤はあくまでも「人民自営」が望ましいが、当面は「国家ノ力ヲ以テ低利貸付又ハ為荷替其他適当助成」し、「直輸者ヲ奨励」する必要を述べている。

最後に、検査所設置の点であるが、これまでも繰り返し

杉田が指摘しているように、「不揃又ハ不正ノ品」の製造・販売によって信用を失う可能性を憂慮している。検査所は府県単位でもなく、組合単位でもない、「国家トシテ検査所ヲ設ケ輸出羽二重ヲ一般ニ検査スル」点を強調している。一律検査による輸出羽二重の統一性を杉田は強く主張している。

(3) 絹織物商人との問答の検討

英国商人へのインタビュー⁽⁵⁴⁾で、杉田は羽二重以外の日本産絹織物のうち、英国で「流行ファッションの先導から外れたもの」を尋ねており、「男性用コート裏地」という返答を受けている。この裏地は低価格が人気の秘密だという。

コートであるから、裏地の価格を抑えつつ、付加価値を英国側で付与することによってコートに高価格を付するという仕組みであろう。また、英国における羽二重用途は、女性向けのドレス、ジャケット、ケープ用染色済裏地などであるとも商人は答えている。

次に、興味深いのは、以下の問答である。ファッション産業がアパレル産業から分離し始めていた一九世紀末ヨーロッパと、アパレル産業が勃興しつつあった日本との大き

な落差が凝縮されている。まず、杉田の問いは「日本製絹ハンカチーフの品質が改善された場合、価格が比例的に上昇したとしても、英国での需要は増加するでしょうか」である。これに対し、英国商人は、「品質の問題よりは、むしろ、流行品の購買意欲をそそることができると、とりわけ、デザイン、染色、縁の種類等が非常に斬新であることが重要でしょう」と答えている。

ハンカチーフの製造にあたって、英国商人は「品質の問題」でなく、「デザイン、染色、縁の種類」を強調している。一九世紀末のミシンは、既に本縫だけでなく、環縫、縁縫、刺繍縫などの複雑な縫製が可能となっていたことを考えると、⁽⁵⁵⁾英国商人の強調からは、彼が織物の最終形態に精通していたことが窺える。先述したとおり、杉田は、視察草稿のなかで、「耳ガ悪シク且筋アリ、光沢ナク平均ナラズ不揃」という点を羽二重の改良点であると考えたが、このインタビューでは品質改善という用語を用いている。英国商人がとりわけデザインを重視しているのに対し、杉田の方はあくまでも製造面に注目している。

また、杉田は、英国で日本製絹ハンカチーフが大量かつ廉価に販売されている事態の理由を尋ねてもいるが、これ

について英国商人は、供給過多による見込輸入によって製品を仕入れ、その販売にあたっては製品の引き受け先を無理やりにでも探す形で行なわれると返答している。この英国商人の着想からは、需要創出が在庫処分という物的要因を持つている点が如実に理解できる。

以上の通り、杉田の視察における最重要な着眼点も踏まえ、杉田の輸出対策案は、流行支配が困難ゆえ精製品より半製品として輸出すること、すなわち、リヨンをはじめとするフランス諸地域で最終加工を経るべきであるということ、そして、福井羽二重の品質を考慮し、生羽二重より練羽二重に販売力があると睨んだこと、この二点が輸出対策案として意義深いものであったといえる。この結論は、第二回絹織物視察にあたる一九〇〇年の渡欧においても、繰り返し強調された事柄であった。

四 第二回絹織物視察―機械化への指向―

「第二回絹織物視察」は、一九〇〇年六月から一一月にかけて行なわれた。①絹織物工場見学、②編機・ミシンやパリ万博カタログ収集の二点に大きな関心が寄せられた。第一回視察で強調された羽二重輸出案は、第二回視察にお

いても検討されたものの、織機の機械化に関心の比重は大きくシフトしていた。帰国後まとめられた『海外絹織物調査報告』によると、捺染を経ずに輸出する点など、第一回視察報告で強調された具体的輸出案を論じる半面、主に、品質、生産性、工賃といった側面から、欧米の「機械製」と日本の「美術品」における断絶を憂慮している。この視察で彼が集めた諸機械のカタログは多種にわたり、力織機目録をはじめ、編機やミシンなど編地・衣料製造部門向け機械の目録をも持ち帰っている。

(1) 羽二重検査委員会

前章でみたように、杉田は「輸出組合ヲ設ル事」「金融ノ便利ヲ付クル事」「検査所ヲ設ル事」の三点が、福井工業化、しいては日本の輸向絹織物業の隆盛に必要な施策であると考えた。

とくに、福井の輸向羽二重の活況が日本のそれを牽引するとの認識から、輸出羽二重検査の本格的な導入の必要性を杉田が感じていたことは、以下の第一四回「衆議院委員会會議録」のうち、「一〇六 羽二重検査費国庫補助ニ関スル建議案(杉田定一君外七名提出)委員会會議録」(以

下、羽二重検査委員会と略す)に記されている。当委員会は、一九〇〇(明治三三)年二月九日に衆議院議長片岡健吉の指名により、朝倉親為、浅野順平、秋山元蔵、杉田定一、有馬要介、上條謹一郎、三田村甚三郎、鈴木惣兵衛、金井貢の九名が選定されたことが始まりであり、後日、委員長に杉田、理事長に三田村が選出された。第一回委員会は二月一三日に行なわれ、秋山元蔵を除く八名で審議がなされた。

①第一回委員会

委員長杉田の羽二重検査所設置に向けた理由を検討しよう。まず、福井県の輸出向け絹織物業の成長と羽二重検査所設置の流れは以下の通りである、すなわち、「福井県絹織物業カ近年頓二長足ノ進歩ヲ為シ、其ノ産絹ノ如キ一躍シテ海外貿易ノ主要产品タル位置ヲ占メ、其ノ盛衰ハ直ニ国家経済ノ消長ニ影響ヲ及ホスニ至リシハ、蓋全ク明治二十四年福井県絹織物同業組合ニ於テ羽二重検査所ヲ設ケ以テ産絹検査ノ方法ヲ勵行シ、粗製濫造ノ弊ヲ途絶シ信ヲ外商ニ博シタル⁵⁷⁾」。そして、一八九一(明治二四)年以後前年度(九九年)までの間に、一〇倍の産額をみたという。しかし、検査費もまた数倍にいたり、福井県絹織物同業組合だけで

は検査費の出費が厳しい状況になった。また、輸出向羽二重の産額は、一地方のものとはいえ全国に占める比重が高いため、国庫において相当の補助を与えるのが急務であるというのが杉田の趣旨である。この発言に対し、委員の一人である有馬要介は、現段階で存在する検査所の個数を質問している。杉田の答弁によると、「福井市ニ検査本所アリテ各郡ニ派出所九箇所アリ⁵⁸⁾」とのことであった。また、検査所費用の金額と調達方法に関する鈴木惣兵衛の質問に対しては、費用は一万四〇〇〇円であり、そのうち、三〇〇〇円が福井県の補助、残りの一万一〇〇〇円が組合の支出であるという。この金額に対する杉田の判断は、「之ノミニテハ到底充分ノ検査ヲ為スコトヲ得ス、即チ検査ヲ正確ニ勵行スルニハ現今ノ検査所ヲ拡張セサルヘカラス⁵⁹⁾」というものであった。これを受けて、浅野順平は、「検査費ノ国庫補助ハ豈ニ福井県ノミニ止ラムヤ羽二重製造所何レモ等シク補助スル様願ヒタシ⁶⁰⁾」と補足し、鈴木が政府調査を要する問題であると結んで当日の委員会は閉会した。

②第二回委員会

翌二月一四日、第二回委員会が催された。出席者は、杉田定一、三田村甚三郎、金井貢、浅野順平、鈴木惣兵衛の

五名に、政府委員として藤田四郎も参加した。藤田は農商務次官を務めた人物で、杉田とは書簡のやり取りが頻繁であり、当委員会の後、両者がベルリン滞在時に現地で落ち合うなど、交流が活発であった。

この委員会で藤田は政府側の意見を述べるために出席した。藤田の述べたのは、およそ以下の通りである。すなわち、国庫補助の必要性は認めるが、全国のうち福井県内の検査所のみを優遇するのは穩当ではない、という指摘が一点目である。二点目は、単に検査費として国庫補助を要求するのは「不穩ノ感アリ、仍テ検査費並ニ販路拡張費ト為サルレバ可ナルヘシト信ス」⁽⁶⁾というものであった。この答弁に対し、金井は、政府がどの程度まで補助する意向かと問い、藤田は「各所ニ於テ自給シ得ルニ至ル迄ノ補助スルノ必要アリト信ス」という形で、積極的な国庫補助の意向を窺わせた。上記のような経緯で両日にわたって審議された国庫補助に関する議論は、「販路拡張モ亦目下ノ急務」であり、「他ノ地方ト雖モ政府ニ於テ必要ト認ムル場合ニハ同様ノ処置」を望むという形で加筆・修正が施され、散会することとなった。

③羽二重検査所設置に関する杉田の意図

杉田が羽二重検査所設置を政府へ要求したのは、ひとえに粗製濫造防止を目指したからである。しかし、羽二重における粗製濫造の防止は、大量生産化における均質な製品を保証する目的にとどまらない。第一回委員会において、杉田が「粗製濫造ノ弊ヲ途絶シ信ヲ外商ニ博シタル」と述べたことは、第三章(2)で確認したとおり、「不揃」であると同時に、「見本ト品物ト相違スル」というズレが懸念されていたためである。「信ヲ外商ニ博」すという意味は、まずもって、外商に「見本と異なる」というクレームが付くことを嫌ったとみるべきであろう。製品間の均質性は、見本と製品間の均質性が保証された後に成立するものであって、決して逆ではない。羽二重検査所設置要求には、このような意図があった。

(2) 「海外絹織物調査報告」の検討

さて、羽二重検査委員会開催の四ヶ月後、一九〇〇年六月から、杉田は、農商務省と福井県絹織物組合から囑託を受け、パリ万博における絹織物調査を主目的にした第二回絹織物視察に赴いた。福井ないしは日本の絹織物業に対する杉田の大きな見解は、既に第一回の視察で出ているの

で、ここでは、第二回視察の報告内容として集約された「海外絹織物調査報告」⁽⁶²⁾に限定して検討する。

まず、視察道程は以下の通りであった。一九〇〇（明治三三）年六月三〇日に横浜を出帆し、インド洋経由でフランスのマルセイユへ到着し、リヨン機業地へ立ち寄った後にパリ万博を見学した。その後、ドイツ、ロシア、オーストリア、イギリスへ渡り、さらに米國パターソン機業地を視察した後、太平洋を経て同年一月二三日に横浜港へ帰着した。

帰国後に記された「海外絹織物調査報告」のうち、「列國絹織物」の項目では、スイスの純絹タフタ、ドイツの紡績絹の無地ビロード、イタリアの縐子などを念頭に、これまでの各國織物業は、「自國ノ特有ノ長所ニ向カツテ力ヲ用ヒ、不可能ノ短所ハ他國ニ譲リ各國分業的ナリシ」状況を指摘し、現在は、「形勢一變自國ノ短所ト雖モ力ノ及ブ限リ之ヲ製作シ、自國ノ需用ハ自國ノ品物ニテ供給シ以テ他國ノ輸入ヲ防グノミナラズ、進ンデ輸出ヲ競フニ至ル。是レ各國分業ノ時代ヨリ一躍シテ列國競争ノ区域ニ進入セルナリ」段階に入ったと認識している。各國分業から列國競争への状況変化は、国内需要を国産で賄うことで輸入防止

を目指し、生産超過分を率先して輸出攻勢にかけるという内容をもつと杉田はつかんだ。その結果として、各国産の絹織物が「趣考意匠色合綾取等」が均一に至ったと導出している。また、種々の絹織物の価格低下が生じたため、需要層が「貴族的」（上流社会）から「平民的」へ移行したとみる。

そこで想起されるのが、前回の視察では絹織物市場における羽二重の競合相手が中国製ポンヂエを除きほぼ存在しないこと、すなわち羽二重の世界的優位性を確認した点である。しかし、現在では羽二重の類似品が出回っており、「絹糸紡績交」や「絹綿交」がリヨン近辺や米國パターソンで横行している状況になっている。

このような事態を念頭に、杉田は、日本の手製羽二重に対し、「羽二重製造機械」を用いた欧米機械製羽二重の生産性比較を行なっている。簡単に要約すると以下の通りである。まず、五〇碼一匹の製織に、「日本手製羽二重」では平均七日、「欧米機械製羽二重」では平均二日である。前者に対し後者は三・五倍の効率を有す。その上で、「手製」は一人一台を工女が監督するが、「機械製」は一人二台ないし四台を監督するから、「機械ハ一人ニシテ凡ソ日本ノ

十四人二代ハルナリ」という結論が出る。すなわち、「機械製」は「手製」に対し、「三・五倍×四台＝一四倍」という生産性が算出される。他にも杉田はハンカチーフの生産性比較も行なっている。

また、リヨン製「ボンヂエ」とあるように、前回の視察で中国製ボンヂエを羽二重唯一のライバル品と杉田が指摘していたものの、「ボンヂエ」までもがリヨンで生産される事態になっている点は、各国分業から列国競争への変化を如実に示している。先述した欧米機械製羽二重の登場も含め、品目名と生産地が一体化した特産品の理解は、一九世紀末の時点で既に不可能な状況にあった。

また、興味深いのは、「従来米国ハ佛国ヲ仰ギシモ近来ニ至ツテ其術大ヒニ進歩シ今也殆ンド佛国ヲ俟タザルニ至リタリ」と指摘しているように、米国における捺染整理技術の向上である。世界市場において、フランスの本領の一部である染色・整理部門の絶対的地位が下落していく事態を杉田は目の当たりにしたといえよう。また、杉田は、捺染機や整理機について、米国パターソンの「イーストサイドプリントイングエンドダイニング会社」とリヨンの「ガルニエ会社」の見学を行ない、四年前の第一回視察でみた織

物関連機械に比べ性能的に一層向上している点に驚嘆し、日本の現状と比較したうえで「依然旧態ニ安ンズルハ豈長大息ノ至リナラズヤ」と記している。機械織と手織との比較は、「日本絹織物」の項目においては、「商売品」と「美術品」という二分法として換言されている。「欧米各国」の絹織物が実用的であるのに対し、「日本品ハ美術的」という結論である。

機械製織物の重要性に対し、このような理解を示した杉田は、続く「日本機業家ノ覚悟」という項目で、「商売品」ないしは「実用品」の製織を強調する。「名譽固ヨリ欠クベカラザルモ目的ハ利益ニ在リ、果シテ然ル将来、我日本ノ絹織物タルヤ美術品ヲ製シ名譽ヲ博スルニ重ヲ置クヨリハ、寧ロ実用品ヲ製シ利益ヲ得ルヲ主眼トスルニ在リ。約言スレバ、高クシテ少シク売レル物ヲ製スルヨリ、成ルベク安くシテ多ク売レル物ヲ作ルニ在リ」。以上のとおり、杉田は機械製織物への転換を強調したが、いわゆる機械化にむけては、第一回視察でもみられたように模範工場設置の必要性を指摘している。模範工場へ各種の機械導入と外国教師雇用によって「生徒」を養成する目的であった。

グローバル経済の段階に入っていた一九世紀末という限

界はあるものの、杉田の海外視察を端的に評価すれば、以下に尽きる。すなわち、他国での絹織物業視察という産業的才覚が必要とされる局面において、自由民権運動に代表される政治家としての杉田が、絹織物商人とのやり取りや工場見学などをつうじ、絹織物の輸出策にみられたように、調査対象に即した思考を十二分に發揮した点である。

おわりに

羽二重産業における力織機化は、二〇世紀の幕開けとともに本格化した。関税による課税（一八九七年のアメリカと一九〇五年のフランス）と、日露戦争による国内物価の高騰が要因となり、軽目の羽二重生産が流行したためである。⁶³

さて、一九世紀末には既にグローバル規模の市場圏域に日本が編入されていた点は、杉田の海外視察の史料群から理解できる。英国マクルスフィールドの衰退が日本の羽二重輸出に好条件を与えた点からは、他地域における産業の衰退や成功が、別の地域における成功や衰退と連動することが理解できる。マクルスフィールドから福井県への中心工業地交替は、衰退と新興との結節点として、ほぼ同時期に進行した日英同盟締結に照らした場合に大英帝国の衰退

と大日本帝国の新興という大局的な視野で捉えることもできよう。⁶⁴

日本政府から派遣された杉田が、イギリスやアメリカの織機会社カタログを積極的に取寄せた点からは、企業が別の民間企業を顧客とする企業間取引（B to B）だけでなく、国家そのものも顧客とする事態（準えればB to N）が確認される。また、杉田が指摘したように、一九世紀末の時点で、各国分業による品質や品名の独自性はもはや存在せず、品質差も品名も非常に限定的な種類に止まる広域市場が形成され始めていた。

杉田の視察報告から読み取りうる高賃金諸国から低賃金諸国への機械化や工業化の拡大・移動は、「欧米」諸国外における最初の資本主義国となった日本を舞台に、彼の三度の視察期に合わさった形で進行し始めていたのである。杉田の三度にわたる視察は、日本のさまざまな産業が機械化する転換期に重なっていた。織機の場合、手織機の一つである大和機に、ジョン・ケイの発明による飛び杼機能を備えたバツタンを装備できた一九世紀中期日本の状況とは異なり、高度に自動化された鉄製織機（いわゆる力織機）の時代を迎えていた杉田の活躍期において、彼は、従来の

織物業・染織業の輸出活性化を願う半面で、産業諸部門の生産手段自体を総入れ替えする必要性、換言すれば、全面的機械化を痛感した。⁽⁶⁵⁾第二章「(1)杉田にみる中国観・欧米観の差異」で指摘したように、杉田のなかで形成されていた二分法的結論が、「欧米化」という形をとり、機械化の必要性という結論と連動していたことは明らかであろう。

絹織物業を通じて彼が触れた西洋文明とは、西洋出自の生産財メーカーの製品を利用した列国競争の世界であり、それは、洋の東西を問わず展開が可能なものであった。表1のうち、「(b)第2回絹織物視察」でみられた種々の織維機械、とりわけ、織機・編機・ミシンは、その従順な導入主体の登場を今や今やと待ち構えていたのであった。

(依頼原稿)

- (1) 大阪経済大学日本経済史研究所編「杉田定一関係文書目録」(大阪経済大学図書館発行、二〇〇七年、以下、単に「文書」と略す)、整理番号「二八一―四三二七―八」。
- 以下、本稿に掲げる史料番号は上記目録の整理番号に拠る。

- (2) Karl Marx, "Das Kapital", Karl Marx - Friedrich Engels Werke, Bd. 23, Dietz Verlag, 1962, S. 497.
- (3) 資本制の本質、ないしは資本の本質という方が妥当か

と思われる。具体的には工業組織の本質である。この点に関して筆者は、ミシンという裁縫機械のもつ小型ゆえの可動性に着目し、生産体制や生産組織に関する再検討から資本制の特徴を捉えようとした。岩本真一「一九世紀後半―二〇世紀前半の日本におけるミシン普及の趨勢と経路―マルクスのミシン論に触れて―」(『経済史研究』第一号、二〇〇八年)。

- (4) 角山幸洋「日本の織機」(永原慶二他編『講座・日本技術の社会史 紡織』日本評論社、一九八三年)を参照のこと。

- (5) 註1参照。

- (6) 「文書」三四―七五。

- (7) 「文書」二六一―二六。当論には執筆年が明記されていないが、叙述には、「近頃彼ノ安南ハ仏ノ為メニ破碎セラレ遂ニ城下ノ盟ヲ為シテ」とあり、また、「支那又殆ンド仏ト一大戦ヲ開カントノ殺氣黯憺東洋ノ天ニ迫リ」とあることから、おそらくはアルマン条約締結(八三年)以後、清仏戦争勃発(八四年)までに記されたものと判断される。

- (8) 「文書」七一―〇二。

- (9) 杉田が一八八〇年代に記した「電気燈」は、既にロンドンで実用化されており、文字通り、ガス燈ではなく電気燈であったと考えられる。なお、一九世紀におけるベルリンの石油燈、パリのガス燈、ロンドンの電気燈の登場と趨勢、繁華街の夜景、種々の街燈が電気燈へと収斂

されていく経緯については、ヨアヒム・シュレーア『大都会の夜―パリ、ロンドン、ベルリン 夜の文化史―』

(平田達治・近藤直美・我田広之訳、鳥影社ロゴス企画部、二〇〇三年)を参照のこと。また、パサージュや街燈の登場によって、夜に月や星空を見る習慣が減少し、人間が宇宙の一環から外れ一つの疎外状況に陥った経緯については、ヴァルター・ベンヤミン「パリ―十九世紀の首都―」(『ベンヤミン著作集六 ボードレール』川村二郎・野村修編集解説、晶文社、一九七五年)を参照のこと。

(10) 中国にとって日本が東洋であるとの杉田の指摘は重要である。アヘン戦争以後日中戦争期にかけて単に「鬼子」であったイギリス人が「西洋鬼子」と呼ばれるようになり、日本人が「東洋鬼子」と呼ばれるようになったように、日本にとって中国が「東洋」概念に組み込まれるかどうかを問わず、中国にとって日本が東洋なのである。なお、二〇世紀前半の中国に写った日本像については、武田雅哉『鬼子』たちの肖像―中国人が描いた日本人―(中央公論新社、二〇〇五年)を参照のこと。

(11) 銭国紅『日本と中国における「西洋」の発見―一九世紀日中知識人の世界像の形成―』(山川出版社、二〇〇四年)。

(12) 劉建輝『魔都上海―日本知識人の「近代」体験―』(講談社、二〇〇〇年、四五頁)。

(13) 関立「清朝同治年間における幕末期日本の位置づけ―

幕府の上海派遣を中心として―」(『大阪経大論集』第五九巻一号、二〇〇八年五月)。

(14) メルシエ『十八世紀パリ生活誌―タブロー・ド・パリ―上・下、原宏編訳(岩波書店、一九八九年)。

(15) パリ改造の前後にみられた喪失と創成については、ヴァルター・ベンヤミン、前掲論文を参照のこと。

(16) この点、杉田が清国で向けていた視線は、トップ・ブランドやファッション最先端という先入観を頼りにパリへ向かい、繁華街を遊歩する間に、汚物都市パリの名残に直面して言葉を失う日本人消費者の視線に似ている。今年開催された北京五輪の場合では逆の感想が増加する。すなわち、ゴミがあまり落ちてなく屋台や物売りもなかったといった類である。いずれも、パリは清潔文明、北京は不潔野蛮といった、欧米中心史観のうちでも最も短絡的な部類に入る印象・先入観である。

(17) 「文書」一六一―一。

(18) 杉田が北京に赴いた要因について、本文で記した点以外は現段階で確認できていない。なお、清国に渡った経緯については、参照した杉田文書以外に、雑賀博愛『杉田鶴山翁』(鶴山会、一九二八年)が明瞭に記している。雑賀は「未開未拓の亜細亞」(同書、五六九頁)に対するヨーロッパ諸国の軍事的侵略(『海国主義』同頁)と「経済的侵略」(五七〇頁)への危機感から、清国視察の必要性が生じたと要約している。同書は杉田の清国滞在状況

についても理解しやすい。

(19) 「文書」七一〇—二。

(20) 小川直美「大陸の幻想—支那在留日本人小学生綴方現地報告」から—(『大阪経大論集』第五八巻七号、二〇〇八年三月)。

(21) 父の仙十郎が地元仏教勢力と決別したことを背景に、杉田定一はキリスト教への親近性を有した(家近良樹「ある豪農親子の近代—杉田仙十郎・定一夫婦の場合—」(日本歴史学会編『日本歴史』七二二号、二〇〇八年七月)。杉田における二分法的な認識は、このような点にも関わる。なお、杉田が『遊清雑唸』(「文書」七一〇—二)等で月夜について詩を何度か記しているように、人間や街路を写さない視線にとって中国は、後の二〇世紀においても絶景を約束させる場所であり続けたが、他方で、人間や街路を写す場合、日本からの渡航者たちは小川直美(前掲論文)の指摘するような先入観を無意識に表明する傾向を強めていく。

(22) この項目は、特に断りがない限り、George Longden, “*Life and Labour in Victorian Macclesfield*”, Neil Richardson, 1983; Louanne Collins & Moira Sewenson, “*Silk, Sarsanets, Satins, Steels and Stripes*”, Macclesfield Museums Trust, 1994; Louanne Collins, “*Macclesfield Silk Museums - At Look at the Collections*”, Macclesfield Museums Trust, 2000; Dorothy Bentley Smith, “*Past Times of Macclesfield*”, Volume II, Landmark Publishing

Ltd, 2005.の四点を参照した。

(23) T・S・アシュトン、中川敬一郎訳『産業革命』(岩波書店、一九七三年)四一頁。

(24) 同右。マクルスフィールドは、養蚕↓製糸業↓絹織物業という展開をみせているため、厳密には「絹業」と区分しておくのが無難である。

(25) 武居良明「一九世紀イギリスにおける絹工業—貿易自由化と地場産業—」(『社会経済史学』第五二巻四号、一九八六年一〇月)。

(26) 以後のマクルスフィールドの概要を記すと、以下の通りである。二〇世紀初頭には、製糸・絹織物メーカーが人造絹糸の試作段階に入ると同時に、マクルスフィールドの諸工場は、新たなプロセスや技術に革新的・適合的な体質へ転換した。第二次世界大戦中、当地の諸工場はパラシュート用の絹織物を製織するなど、軍需産業に着手した。二〇世紀後半の五〇年間も当該産業は衰退を続け、外国製造会社に匹敵することは不可能な状況にある。今日ではごく少数の工場が、紡績、染色、製織、捺染(プリント)、刺繍などに従事するに過ぎない。

(27) 武居良明、前掲論文。

(28) 「文書」二八一—二二八。

(29) 「文書」二八一—四三二—七—一五。

(30) 「文書」二八一—四三二—七—一八。

(31) 他にも、ロンドン通信各号・原稿では、杉田の日記や思索が具体的に読むことができ、(「文書」三三二—四—五

など。

- (32) 「文書」二八一―三七一一。
- (33) 「文書」二八一―三五―二七一。
- (34) 「文書」三〇―二八一。
- (35) 「文書」二八一―三五―三三二。
- (36) 三上孝司・出淵勝次『福井石川両県下機業調査報告 明治三十三年』（高等商業学校、一九〇一年）。以下、引用は「国立国会図書館 近代デジタルライブラリー」による。なお、『福井市史 資料編一〇 近現代二』（福井市、一九九一年）七三八―七四六頁では、この報告のうち、「第一章 沿革」が収載されている。
- (37) 同右、七頁。
- (38) 同右。
- (39) 同右、七―八頁。
- (40) 同右、八頁。
- (41) 同右、九頁。
- (42) 同右、八頁。
- (43) 「文書」二八一―三三二。
- (44) 「文書」二八一―三五―四五。〔羽二重商況設問一覧〕（全一六問に付）。
- (45) 「文書」二七一―三三一。
- (46) 「文書」三七―八。両者「欧米羽二重商況視察報告」は、①の問答の有無以外には、注釈的に（）、強調的に「」の区分がある程度で、概要は同じである。
- (47) 農商務省商工局編『欧米羽二重商況視察報告』（有隣

堂、一九九七年）一頁。

- (48) 同右。
- (49) 「文書」二七一―三三一。
- (50) 「文書」三七―一四。
- (51) 表題に「書」の文字が抜け、見返しに「書」がある。
- (52) 「文書」三七―八。
- (53) 続く箇所では、「東洋諸国等に向つて輸出するには我邦に於て染方付したる者も或は可ならんか是は別問題とす」と述べているように、東洋諸国においては白羽二重である必要は感じず、染色加工を日本で施す点を強調している。
- (54) 「文書」二八一―三五―一九。
- (55) 岩本真一「日本におけるミシン輸入動向と衣服産業の趨勢―二〇世紀転換期の大蔵省主税局編『外国貿易概覧』を中心に―」（『大阪経大論集』第五九卷二号、二〇〇八年七月）。
- (56) 参照元は「国立国会図書館 近代デジタルライブラリー」。
- (57) 同右、八六四頁。
- (58) 同右。
- (59) 同右、八六五頁。
- (60) 同右。
- (61) 同右、八六六頁。
- (62) 「文書」二八一―三三二。断りのない限り、以下の引用は全てこれにもとづく。

- (63) 小木田敏彦「機業投資としての力織機化―一九〇五―一九一四年の羽二重産業を例に―」(『経済地理学年報』第四七卷三号、二〇〇一年九月)。
- (64) 蓮實重彦・山内昌之『20世紀との訣別』(岩波書店、一九九九年)、特に「日英同盟と日米安保条約」。
- (65) 一八世紀イギリスと米国における織機の進化と、一九世紀日本における受容の概要については、角山幸洋、前掲論文を参照のこと。

(いわもと しんいち・大阪経済大学日本経済史研究所研究員、

同大学非常勤講師、大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程、

国立民族学博物館特別共同利用研究員)